

鵜野祐介編著

『日中韓の昔話 一共通話型三〇選一』

(みやび出版、2016 年)

吉 岡 一 志

「昔々あるところに」と聞けば、誰しもが「おじいさんとおばあさんが」とつい口をついて出てくるのではないだろうか。ある種の決まった語り口を持つ話、これが昔話である。私たちが幼いころから何度も耳にしてきた昔話は、日本人のアイデンティティを推しはかる素材としても欠かせない。ところが、私たちに血肉のようにしみ込んでいる昔話は、よく似たものが海外にも見出される。本書は、こうした一見「日本の伝統」に傾きがちな私たちの目を、日中韓との比較を通して、東アジアという広大な世界へ誘ってくれる。

本書は、「あとがき」によると、2008 年に逝去された故稲田浩二氏の研究課題を編著者が引き継いだものだという。これまで昔話の要素を抽出、分類することを目的としたタイプインデックスの研究では AT と称されるアールネ・トンプソンによる『昔話の型』が世界基準として採用されてきた。稲田氏は、AT がヨーロッパの資料に偏り、論理的な構成を欠くという点で限界があるという問題意識から、アジア民間説話学会を立ち上げ、新たな国際的なタイプインデックスの構築を目指していたようである。そのため本書は稲田氏の研究課題の一成果であると言ってよい。

ここで、本書の意義を理解するため、少し遠回りになるが、これまでの分類研究の足跡を簡単にたどっておこう。1910 年にアンティ・アールネはフィンランドの昔話を話型（タイプ）によって配列する手法を考案した。これにアメリカのスティス・トンプソンがヨーロッパ以外の資料も取り入れ、二度にわた

る修正を施したものが AT である。AT に負いつつ、国際比較を射程に捉えて日本の昔話を整理したのが関敬吾氏の『日本昔話集成』と、稲田氏の『日本昔話通観』である。これらの業績により、日本においても昔話の国際比較研究の門戸が開かれていくことになった。

AT は、2004 年にイェルク・ウターにより新たな資料の追加とともに分類が見直され、2016 年には『国際昔話話型カタログ分類と文献目録』として日本語に翻訳された。現在では AT にウターの頭文字を加えた ATU が新たな世界基準とされている。

ただし、残念ながら、ATU も日本の資料が十分に組み込まれているとは言いがたいのが実情である。その意味で、日本をはじめアジアの研究成果をまとめ広く発信していく必要があるだろう。本書が取りまとめられた価値の一つはここに見出される。

さて、ずいぶんと前置きが長くなってしまったが本題に入ろう。本書の「はじめに」でも言及されているように、これまでも国別、あるいはテーマ別の昔話集は数多く出版されているものの、同じ話型を並べて比較するといった今回のような試みはほとんどない。このことも本書が、大変貴重で有意義なものとなっている所以でもある。

本書は、題名の通り日本、中国、韓国の三か国において伝承されてきた昔話の中から、共通の話型を持つもの 30 種を選定し、各国の昔話を各種の出典から抜き出したもの、計 90 話が掲載されている。目次を見ると「Ⅰ. 動物物語」が 5 種、「Ⅱ. 昔語り」20 種、「Ⅲ. 笑い話」5 種の話型で構成されている。取り上げられている昔話は「柿争い」、「塩ひき臼」、「天人女房」、「犬むかし」、「姥捨て山」、「尻ひり嫁」など有名なものが多い。「日本の昔話」だと思いついていたこれらの話が、海外に似たものがあるというだけでも大変驚かされる。

その類似性を実感してもらうには同書を手にとっていただく他ない。それでも評者による稚拙な要約でお許しいただけるなら、一つだけ紹介してみたい。動物物語として掲載されている「猿の生き胆」は、出典のタイトルに従えば、日本では「たこの骨なし」、韓国では「兎の肝」、中国では「猿とスッポンの義兄弟」となっている。ここでは紙幅の都合上、日韓の紹介に留める。

「たこの骨なし」のあらすじはこうである。昔、海底の竜宮では乙姫が病に

かかり、易者が言うには猿の肝以外に病を治すすべはないという。そこで海中も陸も移動できる亀が任を受け海岸にたどり着くと、木の上にいる猿と出会う。亀は肝の話は伏せたまま歓待を条件に猿を誘い、竜宮の門前まで戻ってくる。ところが、タコの不用意な発言により猿は自分が騙されたことに気づいてしまう。猿が「木の上に肝を忘れてしまった」と言うので、困った亀はまた猿を背に乗せて陸へ戻る。すると猿は木の上に登り「肝は腹の中」だと言う。口惜しいながらも木に登れない亀は竜宮に引き返し、事の顛末を伝えたところ、タコは先の失態を咎められ、背骨を抜かれてしまう。以上が日本の「猿の生き胆」である。

では次に韓国の「兎の肝」を見てみよう。ここでも舞台は竜宮であるが、病にかかるのは王である。名医が王の病気を治す唯一の方法は兎の肝だと進言したことを受け、使者として亀に白羽の矢が当たる。亀は兎の似顔絵を携え、陸地で兎を発見する。亀は招待したいと嘘をつき、竜宮に兎を連れていく。王が兎に肝が必要だと真実を打ち明けると、兎は王が病だとは知らず陸に肝を置いてきてしまったと取り繕い、再び亀の背に乗り陸に戻る。兎は陸に上がると「肝を出し入れするやつがどこにいる」と叫んで森の中に逃げていった。

以上、日韓の昔話を見てもらったが、要約の拙さを差し引いても、偶然の一致とは思えないほどの類似性があることがわかるだろう。なぜこれほどまでに似ているのだろうか。さらに言えば、ATUにも「心臓を家に置き忘れた猿」という話型が登録されており、ヨーロッパ、中東、アフリカにも類話が認められるという。「猿の生き胆」は「日本の昔話」どころか、アジア、そして世界中にその類話が存在しているのだ。稲田氏の言葉を借りれば、昔話のこうした国際的な広がりがこそ「昔話のあやしい魅力」(稲田 2010 18 頁)なのである。

本書では各話型の紹介の後に「話型とモチーフ」「古典資料」「起源と伝播」「国別の特徴」など丁寧な「解説」がつけられており、この類似性、そして国ごとの微妙な違いを読み解くための手がかりが与えられる。「話型とモチーフ」では三か国における話型の整理を紹介するだけでなく、ATUなどとの対応関係が確認され、各話型の国際的な位置が示される。話型によってはATUとの明確な対応関係が見いだせないものもあり、分類作業の困難さを垣間見せるとともに、世界基準の再編を迫る余地が示唆される。

「古典資料」では文字として残される各国の古典が日韓中に限らず広い範囲で紹介され、さらにこれらの「古典資料」から、該当する話型の伝播経路について考察し、そのルーツや歴史的、地域的変遷に目を向けてくれるのが「起源と伝播」である。ここでは、三か国の昔話の世界規模の類似性、あるいは反対に東アジアの独自性が確認できる。一方「国別の特徴」では、日韓中の昔話の差異が整理され、各国の昔話の背景となる思想や信仰等との関係性から国別の特徴が考察されている。

以上、本書の魅力や構成について紹介してきたが、最後に本書を読むうえで注意点を指摘して終えよう。それは、掲載話のみを比較してその相違点から安易な日本人論へと陥らないよう、用心深く本書を読み込んでほしいことである。

本書では、掲載されている昔話がどの時点で採取された話なのか、直接出典にあたらない限り見えてこない。そして「古典資料」で周到に過去の話型が紹介されるがために、却って掲載話が該当する昔話の最終形態に見えてしまう。これをもって日中韓の比較をすることで、昔話の歴史性を見落としたまま各国の独自性の議論へと結びついてしまう恐れがある。変化を前提とする昔話だからこそ、どの時点の特徴を日本の固有性と思わずには慎重になされるべきである。このような時間軸からみた各国の固有性をめぐるのは、本書の「古典資料」が扱っているのだが、掲載話の採取時期が不明瞭な点には注意を要する。

これと併せて昔話の担い手に関する情報がない点にも注意が必要であろう。例えば貴族や武士、庶民といった語り手の身分の違いなどについてはあまり言及されておらず、そのために一つの昔話をもとにすべての日本人に共通した心性があるようにも見えてしまう。同じ国内であれ、決して一枚岩の「国民」ではないはずである。「国別の特徴」において「本土」「アイヌ民族」「琉球」といった比較の視点こそあるものの、やはり共通する日本人へと視線が注がれやすいように思える。ただし、昔話の口承という性質上、語り手の解明は、史料的制約があることが否めないところではある。

このように、日中韓の比較を通して相対化された「日本の昔話」が、再び「日本の昔話」へと帰属してしまうことに読者は禁欲的であることが求められるだろう。各国の固有性に言及する際の編著者の慎重な姿勢に、読者は学ぶべきと

ころが多いと思われる。しかしながら、そもそも、タイプインデックス研究は、昔話を抽象化し、その要素を取り出して分類することに関心を持つものであり、必ずしも類似性や異質性をいかに解釈するかという点を第一の主題としているわけではない。むしろ本書が行ったアジアの昔話の整理という功績により世界的なタイプインデックスがより精緻化されていくことで初めて、評者が指摘したような昔話の微細な変容の様相が探求可能になるだろう。

まずは、本書を手に取り、日中韓の昔話が想像を超えるほどの類似性を持つことに驚愕してほしい。そして「昔話のあやしい魅力」に、存分に浸ってほしいと願うばかりである。

引用・参考文献

稲田浩二・稲田和子 (2010) 『日本昔話ハンドブック』三省堂。